

『待つ』という行為には、大きく2パターンある気がする。

ひとつ、ただなんとなく……ボーッと待つ。

ふたつ、準備万端『待っていました〜』と待つ。

すべてにおいて……とは言えないが、準備は必要で、しておいた方が良し、準備そのものが楽しいこともある。

星を見るには場所探し。周りに明るい電灯などが無くて、出来るだけ地平線まで見渡せる広くて安全安心な場所、かつ周囲に迷惑のかからないところが良い……らしい……。実際には、なかなか難しい条件で、全部そろわないことが少なくないのは、とても残念だ。

また、時間も案外重要だ。そんなに遠くない昔、時間の流れはゆっくり感じられて、夕空の移りゆく様も、ゆったりと眺めていられた。確か、暗さに慣れていく余裕が持てた。夕景から夜景を表現する言葉の豊かさは、古^{いにしえ}の人々の暮らしに根付いた観察の細やかさを物語っているように思う。

『宵^{よい}』という時間帯が『夜』への準備、大事な『間^ま』として橋渡しをしていたように感じられる。昨今、『宵』が使われなくなり、軽んじられているような気がするのは気のせいだろうか？

息が白く、手がかじかむようになる季節の夕間暮れ。外で星を眺めるのに防寒対策は万全でないとい非常に辛い。

かつて真冬のベランダで望遠鏡を向けて覗いたのは土星だったろうか？ フル装備をして身動きがおぼつかなくなりながらも、金毛に包まれたようなぼわぼわした土星の姿をとらえると、ほおがゆるんだ。宇宙望遠鏡や探査機から撮影されたシャープでクリアな画像とは別の趣。なんといっても自分の眼と土星の間にあるのは、小さな望遠鏡のレンズと宇宙空間だけ……。誰にも邪魔されない贅沢というもの。格別だ。

そして、とっておきは膝の上の猫、ぬくぬく極楽「この寒いのに外に出るなんて、にやんて迷惑な……」と思っているのかいないのか、丸くなって、ここが定位置といわんばかりにクークー寝息をたてていた。これも自分の役目と、わかっていたのだろうか。

あれからもう10年以上。ずいぶんと、この寒がりを温めてくれて、ありがとう！ 相棒！！今は、すっかり星の世界に辿り着き、なわばり争いに忙しい頃だろうか？ もしかしたら、幻の『ねこ座』あたりに陣取っているかもしれない……。だといいな……。そんなことを空想しながら、今宵も星を待つ準備。そんな日々も、あったっけ……。

さて、いつの頃からだろう？ 天気予報に『流れ星』の情報が大段的に姿をあらわし始めたのは……。事の始まりは、たぶんきっと、2001年11月19日未明の『しし座流星群』ではなかったか。

寒々と晴れ渡ったその夜。過去の記録と研究から33年周期で『流星雨』になると予想され期待され外れた1999年前後。3年目の正直？ 諦め切れず信じて、寒空を見あげていた人々のもとに流れ星は降り注いだ。それこそ雨のように……。

「！！！」

その時の私はといえば、毛布（コタツ布団だったか？）にくるまり毛糸の帽子にマスク！ どう見ても完全に怪しい人（笑）だった。

そんな恰好に気兼ね無く、一人庭で空を眺めていたが、不思議に怖れも孤独も無かった。

一際大きく明るい流星が空に現れる度、どこからともなく、本来は静まりかえっている山間に「うわぁ」「うひゃ」と、なんとも表し難い歓声と声にならずとも感動している空気の波のようなものが伝わってきて、一緒に、たとえそばにいらなくても、みんな同じ思いで空を見ているのだなど温かな気持ちになっていたのだった。

ならば、毎年『大流星雨』とはならなくても、あの時の想いが多くの人々の心に「あれは、かけがえのない幸せな時間だった……」と残っている限り、11月中旬の『しし座流星群』の話題は、天気予報に取りあげ続けられるのだらうと思う。

そうだ、もう一つ、畏敬の念を持って眺めた記憶がある。1996年早春『百武第2彗星』‘コマ’と呼ばれる丸い先端部の青みがかかった緑色の美しさ、それはそれは長い尾が見事だった。『天空を横切る』では足りない『見あげて仰いで反対側に視線を落とす』感じだった。まさに口があんぐりと開いたまま、くりかえしくりかえし大きく首の運動をするかのように、それこそ、首が痛くなる程見つめていた。

たかが数時間と侮ることなかれ、どちらも未明から明け方にかけての約1/4日にも満たない時間ではあったが、一瞬でもあり永遠でもありうるような気がする。二度と出逢えない瞬間は今でも消えることのない思い出だ。

ピンポイントで、ある日ある時間だけ見られる『流星雨』より、ある期間見られる明るい彗星（ほうき星）の方がお目にかかれるチャンスが多く、『待つ』甲斐も大きい場合も中にはある。

しかし、有名な『ハレー彗星』の1986年の接近後、今は太陽系の端へ向って、地球からどんどん離れ、遠ざかっている最中。戻ってくるのは未だ先なのは少し残念なことだ。

人生の折り返し地点を過ぎてしまった感のあるコチラとしては『待つ』にもタイムリミットが待っていて、やるせない気がするけれど、事実であり現実だと、わきまえることにしている。

そう考えると、この『ハレー彗星』の周期は実に感慨深いものがある。いくら人間（特に日本人）は長生きできるようになったとはいえ、視力や記憶、体力・気力・感性が良好な状態で一生に一度しっかりと見られるか否か……そこに天気という‘運’も絡んでくるのだから。その年月は絶妙な天の配分と納得がいく。

次の回帰となるのは2061年頃とされている。高性能の望遠鏡、いや宇宙望遠鏡に探査機、

そして快適な室内に居ながら大型モニターでリアルに『ハレー彗星』を見られるように……なっているかもしれない。

それはそれで、素晴らしいことだと楽しみでもあるが、どんなに技術が進んだとしても、素朴な自然は相変わらず残っていてほしいと願う。

私としては、地面に寝転んで土や草の匂いに触れ、夜気を感じながら、自分の目で眺められるのが最高だと思っている。

昔々、瞳に焼き付けた、ぼよんとした微かな光と、まずは再会したい。立派な尾が星々の間を揺れる姿も見てみたい。

声をかけるとしたら「おかえりなさい」だろうか「やあ、また会えたね」それとも、やっぱり「待ってました〜」。

出来ることなら、その時まで、それ相応の準備をしつつ、ボーッと待つのも悪くない。約 76 年ぶりの過客がやってくるのだ。あせることはない。

願わくば、その傍らに相棒の愛猫がいてくれたら……、何も言うことはない。